# 全力疾走

令和３年１１月２６日（金）発行
多摩市立聖ヶ丘中学校
第３学年
第３０号

１１月中旬から１２月上旬は、紅葉が見頃を迎える時期です。学校では進路に関する動きが本格化し、慌ただしい日々が続きます。ときには少し立ち止まり、周りをみてみましょう。日々の疲れを癒してくれるものが、たくさんあると思います。

## 【マラソン大会の作文】

ずいぶん遅くなってしまいましたが、マラソン大会の作文を紹介します。

限界

奥山　豪

朝７時。目覚ましの音。起きるときは毎日布団という強敵と格闘する。今日は勝った。どんなもんだと思うわけではないが、取り敢えずご飯を食べようと箸を持つ。食べ終わり、学校の準備の最終確認をする。そこまで時間のかかる作業ではない。今日は持っていくものが少ない、マラソン大会だから。

学校での１時間目が終了し、外へ整列。開会式が終わり、ジャージを脱ぎながら思った。まぁ走ったって死なないから大丈夫か……。１年生、２年生がスタート、３年生がスタートした。僕は自分のペースを守って走ろうと思った。陸上競技場の前でもう息が上がった。前が遠くなった。抜けないかと諦めかけたが、抜ける抜けないではなく、自分の全力を出すことが大切であると思い、気持ちを入れ直した。少し進んだ。もっと息が上がってきた。更に脇腹が痛くなってきた。左脇腹から段々腹痛が勢力を広げてきた。足を動かすのが辛い、呼吸をするのが辛い。段々とスピードが落ちてきたのが自分でも分かった。とにかく自分にだけは負けたくなかった。ただただ必死に足を動かし続けた。ゴールまであと４００メートル。

突然、後方から足音がした。追い付かれる。本能的に体が反応した。スピードを上げた。ふと、スピードを上げるタイミングが早すぎたかと思った。その瞬間、足が重くなった。弱気になると体全部に影響を与えるのだと思い、何も考えないようにした。いや、その努力はいらなかった。考えや精神と呼べるものは、もうそこになかった。校庭まで来た。気付いたらゴールしていた。疲れたが、満足感が大きかった。

自分で限界を決めるのはもったいない。もし世の中に「本当の限界」というものがあるのなら、それは死なのではないか。そう感じた。

マラソン大会を終えて

小隈　花恵

今年のマラソン大会は２年ぶりだった。去年はコロナウイルスの影響で中止になったからだ。私は、今回のマラソン大会の前と後でマラソンに対する意識が大きく変化し、自分自身の成長につながった。

私は去年、マラソン大会が中止になったとき、とてもうれしかった。私は長距離に対する苦手意識が大きく、マラソン大会という行事は苦痛だったのだ。しかし今年は実施に至ったのだ。私は最初「何で？」という気持ちでいっぱいになった。なぜ合唱コンクールという比較的みんなが楽しみにしている行事は中止になっ

たのに、マラソン大会は中止にならなかったのか……。そんな不満を抱きながら体育の授業でマラソン大会に向けた練習が始まった。唯一の救いは、体育の授業が給食前に多かったことくらいだった。松井先生にあと何回３ｋｍを走るのか聞いたときに返ってきた「マラソン大会まではずっと走るよ」という返答を聞いたときの絶望感は今でも忘れない。しかし不思議なことに、何回も３ｋｍを走っていると、マラソン大会で走ることに対する抵抗が日に日に薄れていったのだ。「慣れ」というのは恐ろしいものだ。そして迎えたマラソン大会。私は無我夢中で足を出し、手を振った。途中何回か歩いてしまったが、またすぐに走り出した。自分の自己タイムを更新したい、そんな気持ちで必死になっていた。私は体育の授業で３ｋｍを走ったとき、一度も２０分をきったことがなかった。なんとか２０分以内に走りきりたい、そう思いながらゴールした。

マラソン大会が終わった今、私が思っているのはマラソン大会があってよかったということだ。肉体的にも精神的にも鍛えられたので、自分の成長に大きくつながったと思う。私の記録は１９分４５秒。無事に記録を更新できた。苦痛でたまらなかったあのマラソン大会を通して、こんなにうれしい達成感を味わうことができるなんて、思ってもいなかった。苦手なものも何度も挑戦すれば、いずれ結果は出るものだ。この経験を生かして受験に向けて苦手教科の克服に励みたいと思う。

マラソン大会

[redacted]

中学校生活最後のマラソン大会。冷たい風が吹きながらも、おてんと様に照らされて微妙に暖かい、そんな何とも言えない日に大会は開催されました。

男子が先に５キロを走り、その後に女子が３キロを走る予定でした。男子達が戻ってくるのを待っている最中、私は自分が今日走る時のペースについて考えていました。「少しずつ歩いてゆっくり行こう、周りに人もいないし大丈夫だろう。」と考えながら出番を待っていました。

男子が帰って来て女子が走る番になりました。私は考えていた通りにゆっくり走っていました。学校を出たあたりで、その時突然嫌な予感がしました。振り返るとそこには校長先生がいたのです。なんという事でしょう。校長先生は一番後ろを走る私と並走し始めました。嫌な予感は見事に的中してしまったのです。校長先生は私に対して「頑張れ」「辛い所はここを超えたら終わりだ」「ここまで来たらもう行ける」など物凄い勢いで話しかけてきました。まるで隣に松岡修造がいるかのような、そんな気がしました。隣に校長先生がいるというプレッシャーに負けて私はなかなか歩けませんでした。本当に走りたくない時だけは歩きました。校長先生は最後まで私と並走していて、その間ずっと応援され続けました。何とも言えない肌寒さと暖かさを交えた空気も、校長先生いや、松岡修造が隣にいるのが原因かやたらと暑くなりました。

結果として私の記録は２３分。授業の時は２８分なので少しは記録が良くなりました。ですが記録より私は隣にいた先生の方が印象に残りました。

## 【来週の予定】

| 日付 | 曜 | 内容 ・ 連絡 | 給食 |
|---|---|---|---|
| ２９日 | 月 | 中央委員会 | ○ |
| ３０日 | 火 | 生徒会朝礼 | ○ |
| １日 | 水 | | ○ |
| ２日 | 木 | 仮内申通知 | ○ |
| ３日 | 金 | 安全指導 | ○ |